

小説

森山啓文学賞

白山

岩上町 山口 俊一郎

明日は自分が嫁入りする日だというのに、十八歳のサヨはこれと違って特別の緊張感はなかった。只、いつものように外での労働をしなくてもいいのが非日常であった。

嫁ぐ相手は、同じ岩瀬の杉原家の長男・長右衛門である。白峰から、手取川の支流熊瀬川沿いに約八キロ白山麓の谷間の道を通り分けた所にある岩瀬の集落は、戸数は三十軒であるが、一戸当たりの家族が多く二百五十人近くが暮らしている。

人々の日常は、ほとんどの人が屋外での農林業であるので、サ

ヨは長右衛門とはよく会っている。しかし、特別話したこともなく、好きでも嫌いでもなかったが、真面目そうな人だと思っていた。そして長身であることと、無口であること位しか知らなかった。

結婚式といっても、必要最小限の簡易なものであった。前日に、身内の男性二人が白峰まで買い物に行く。

買う物は、酒、醤油、塩引鱈等である。支払は全てツケで、旧盆と年末にまとめて払う仕組みであった。酒は日頃は地元で造ったドブロクのようなものを飲んでいるが、結婚式には清酒を買っ

て皆で回し飲みするのである。

女達は、家の掃除と、当日早朝から赤飯や煮物等を作る。食器も親戚が持ち寄った物を使う。

花婿花嫁の衣装といつても、持ち回りの寄せ集めで間に合わせる。

親族の長老格の老夫妻が、仲人のような役割を演じる。結婚式は、明治十八年三月上旬の大安吉日に行われた。

曆の上では春だが、白山麓の岩瀬は残雪に埋まつており、日中の短い時間だけ少し春の気配がした。

結婚式は、農林業が忙しくなる前の春先に済ませてしまおうの例である。

午前十時に、サヨは自宅から親族の人々と一団となって、徒歩十分の杉原家へ向かう。

杉原家の仏壇の前で、長右衛門と固めの杯を交わした。双方の親族もそれにならった。

サヨは、両家の親族の多さに今更ながらびっくりした。嫁ぎ先の杉原家には、夫の両親を筆頭に、すでに所帯を持っている弟が一人と姉一人、さらに未婚の妹が三人もいることを改めて認識した。しかし、当時はどの家も似たような状況であった。

式の後、昼食の宴会が始まった。

新郎新婦の前には、大きなタライの中で、二匹の石魚が泳いでいる。

昨日買ってきた清酒を皆で一口ずつ回し飲みし、大きな焼き鱈

も回して一むしりずつ食べた。

後は、赤飯の他に、めったに口にすることのない醤油を使ったゼンマイと油揚げの煮物、焼いた石魚、熊やイノシシ、兎の肉等々の料理と、地元で造った酒の会食である。

こんな日の為に作った杉原家の大きな座敷は、人で溢れ返っていた。

式は簡素でも、会食には大勢集まつて、日頃のあこがれであるご馳走を食べ、二人の結婚を大勢の人に披露するのであった。

日頃は黙々と厳しい労働に耐えている無口な人々が、酒に酔い、大笑いしているのを見ている内に、サヨは杉原家の嫁としてしつかり生きていかなければと心に誓った。

早春の日の光が入っている座敷での宴会も、山里の早い夕暮れが忍び寄ってくる頃には終わった。その間サヨはちよつとだけ料理を食べ、隣の夫とは話もなく、じつと座っていた。

しかし、入れ代わり立ち代わり酔った男達が順に夫の前へ来て、お祝いや冷やかしを言っているのを見ると全く退屈しなかった。

それを見ていてサヨは、杉原家は中位の家だが、夫が皆に信頼されているのが分かり嬉しかった。

夫の大きな体が一段と大きく見えた。

外がすっかり暗くなり、寒気が家へ入ってくる頃、リーダー格の女の、「サー、片付けるか」との声に、親族の女達がわらわらと立ち上がった。

男達は車座になって騒ぎ、女達の後片付けの邪魔をしている。

サヨは花嫁から一人の働き手となり、後片付けを手伝った。

「サヨ、ハラ減ったやろう。何でも食べや」

サヨは皆と一緒に、残りの料理を食べた。赤飯と焼き鰯の緑側の肉や、甘辛く炊いたガンモドキ、醤油を使い兎の肉の入った豆腐汁をすすった。前々から食べてみたいと思っていた熊の肉の味噌漬けもうまかった。久しぶりに、砂糖の入った饅頭も食べた。厳しい労働をしている肉体に、しみいっていくようにうまかった。

台所で女達と一緒に立ち食いをしながら、サヨは幸せを実感していた。

やっと自分の居場所が出来たんだと。

長い一日が終わった。

長右衛門とサヨは二人の為に準備された部屋で床についた。二人の部屋といっても大家族との同居であり、襖一つ隔てた隣には家族が寝ている。

疲れていたが、サヨは緊張して寝付けなかった。

思い切って夫に声をかけてみた。

「アノー、あれは何ですか」

小さな床の間にある木彫りの犬カネコか、どちらともつかない小さな置物がサヨは気になっていた。

「アーあれか。あれは五く六歳の頃、ワシが作って皆に褒められたものや」

又沈黙が続いたが、やがて夫の寝息が聞こえてきた。

次の日から何事もなかったかのように、労働の一日が始まった。

村人達の仕事は、ほとんどすべて農林業である。

外へ出て体を動かさなければ、何の収益も得られないし、生きていけない。

家の中では外での労働の材料づくりと、明日への休養の場である。

一つの家は一つの生産団体であり、大きな家は、作男・作女の働き場でもある。

そこで生活する人々は、農林業という生産団体の付属品であり、明治維新の文化・文明の波が少しずつ押し寄せて来つつあるとはいうものの、それはあくまでも人々にとつて受動的なものでしかなかった。自分が主体となつて、文化・文明に取り組んでいけるような人は皆無であり、人々の目標は、あくまで衣・食・住であった。

そして、集落内での生産団体である家同士のライバル心は強く、それが厳しい労働への励みとなつていた。

病人でさえも少しでも家の為に尽くすべく、医者にもかからずじつと我慢し、家に迷惑の及ばないようにすることが病気に耐える気力の源となつていた。

自分が死んでも、家は残る。

平凡・無名の一生でも、家の為に懸命に労働してきたというところが、人々の晩年に満足をもたらしていた。

サヨも例外ではなかった。

昔から続く集落の掟、心に占める大きな家の存在、そして手足を動かすことが少しでも果実をもたらす家の為になっているんだ

という自分の存在意義が、心の充足を生み出していた。

そして作業中、人々の目を盗んで無口な夫がさりげなく自分を守ってくれていることが、サヨには次第に分かつてきた。

明治二十年春、サヨに男の子が生まれた。

生まれる前の日まで、出来る限りの労働はしていた。名前は夫と同じく長右衛門と名付けられたが、長男であるので「タロー」と呼ばれていた。

激しい労働と、山里での食事にもかかわらず、サヨはたっぷりの母乳でタローを育てることが出来た。

不幸は突然にやってきた。

夫の事故死である。

雪を利用して材木を滑らし運搬するのが便利な為、二月中に山の木を切り出すことがある。その時も、共有林の杉の木を切り出していた。午前十一時頃、突然運搬中の木が暴走した。

その時、最年少の十五歳の少年に向かって木が突進した。とっさに長右衛門がその少年を抱きかかえて木を避けようと横へ飛んだが、二人は木の先端に跳ね飛ばされた。

少年は重傷を負ったが長右衛門のおかげで命は助かった。しかし、長右衛門は頭を強く打ち亡くなった。

それでも自然は淡々と流れていく。

岩瀬の山里にも、いつも通り山桜が咲き始めた。

サヨは悲しさを忘れる為、前にも増して一歳になったばかりのタローを抱えてひたすら働いていた。

夫の一周忌が終わって二回目の山桜が山肌に点在する頃、サヨの身辺にはまたもや大きな変化が訪れた。

それは夫の両親から言われたことだが、杉原家を守っていく為

に、
「夫の弟夫婦を杉原家へ入れること。サヨの子タローは亡き長男の子として、杉原家の跡取りであり家に残していくこと」というものであった。

そして、サヨの身の振り方として、金沢の菊川町にある金栄寺というお寺の女中として、住み込みで働くというものであった。

サヨは二歳のタローと別れるのは、身を切られるように辛かった。しかし、夫亡き後、杉原家の空気が自分に冷たいのは感じていたし、たとえ小さなお寺の女中ではあっても、金沢での生活は魅力的であり、岩瀬を出て広い世界へ行ってみたい気もあった。

タローも杉原家の跡取りとして大切に育てられるであろうし、自分が身を引くことによって夫の残した家が続いていくのならそれでもいいか、と決心した。

田植えも終わった六月に、ヤスンギョという日がある。いわば公休日である。この日は集落一斉に仕事を休み、休養するのである。

数日前におミネさんに、家へ来るように言われた。
おミネさんというのは、サヨより二十歳年上で、一種の名物人である。

ともかく体がタテヨコ大きい。山里の岩瀬で、一体何を食べてあんなに大きくなったのか不思議である。集落の最下層の家か

ら、一番の長者へ嫁いだことだけでも話題性は十分である。

おミネさんの大きな家の小さな部屋へ通された。玉子入りのえびすが美味しかった。

「サヨ、あなたは近く岩瀬を出ていく。タローちゃんを置いていくのは辛かろうが、負けるんじゃないよ。」

私は前からあなたが好きやった。あなたは頭もいいし、苦勞した育ちにしては心も広く、思いやりがある。ここを出ていくと、あなたとは二度と会えんような気がする。あなたへの餞別のつもりで、私の知っていることを伝えておこう。聞きたくないこともあるかも知れんが、あなたには聞いておくつとめがあると思うよ」

おミネさんの話は、要約すると次のようなことであつた。

サヨの生母は、いわゆる未婚の母であつたこと。父は峰蓮寺の住職であること。サヨは難産であり、サヨと母体の両方助かる道はない、という産婆の忠告に、母は自分が犠牲になつてもサヨを助けてくれ、と言ってサヨを生んだ後亡くなったこと。サヨの出生に一時は激怒した母の実家も、結局サヨを引き取つて育ててきたこと、等であつた。

おミネさんの話は、サヨがうすうす知つていたこともあつたが、思い切つてこんなことを最後に教えてくれたことに感謝した。

特に峰蓮寺の住職から、それとなく感じる温かさの謎も解けた気がした。

さらにおミネさんは、「残していくタローちゃんのことや、岩瀬のことも気になるやろ。」

金沢の長町に花屋という小さなうどん屋がある。そこへ私の妹

のトシが嫁に行つとる。私と違つて華奢な美人やが、トシに岩瀬のことを伝えとくから、行つて聞いたらええ。名前は花屋でも、うどんはうまくないよ。」

サヨはその後の人生に、どれだけ花屋へ行つて救われたか分からない。

いよいよ岩瀬を離れる日が来た。六月のどんよりとした曇り空の早朝、さすがに故郷を離れるサヨにも、見送る人々の目にも涙があつた。

早朝にもかかわらず大勢の村人が見送つてくれた。おミネさんの心遣いが察しられた。

特に祖母に抱かれて無心に眠っているタローの顔と、山肌の白いコブシの花をサヨは一生忘れることがなかつた。

菊川町の金栄寺は、犀川の堤防に隠れるようにひっそりと建つていた。屋根の形を見て辛うじてお寺と分かる小さなものであつた。

しかし、年老いた住職夫妻だけであり、法事の他に建物や庭の掃除、お寺を抛り所とする人々の出入りもありかなり忙しかった。

サヨには小さいながらも個室が与えられた。岩瀬の大家族の中では味わえないような空間を持つことが出来た。

小学校も満足に行つていないサヨにとって、住職夫妻に学問を教わるのが嬉しく、これだけでも金沢へ来てよかつたと思つた。

住職夫妻はサヨの聡明さと率直さにすっかりほれ込み、サヨに教えるのが楽しみになつていった。

新聞なる物も初めて見た。

檀家さんのくれた切符により、活動写真も初めて見た。

女中の仕事は忙しいといつても、岩瀬の厳しい労働に比べれば余裕があり、サヨは金沢に来て、初めて衣・食・住以外に目を向けることが出来た。

一方サヨが岩瀬を出て初めて知ったのは、白山の魅力である。

白山という名前は、子供の頃からいつも聞いていた。しかし、岩瀬はあまりに白山に近く、その全容を見たことはなかった。

金沢へ来て、白山の全容を見た時、サヨはその山麓の岩瀬という所で生まれ育った自分の小ささと、大自然の偉大さを改めて知ったのであった。

海に命を育む白山からの豊かな水とその水が作った広い平野、山麓に広がる無限の森林、随所に泉となつて湧き出る地下水、それらがあらゆる生きものを育て、文化・文明の生みの親となっていることをはつきりと知ったのである。

金沢へ来て五年、サヨは今ではお経も唱えられるようになった。

住職の勧めにより得度をし、僧侶の資格も取った。時には、老住職に代わり法事に行くこともあった。

サヨの説教は人気があった。

初めは、経典や昔の高僧の教えを引用していたが、いつの頃からか日常の平凡な営みにおいて、仏教の持つ意味やその必要性を自分の言葉でしゃべるようにした。それはサヨの心中の自問自答の告白であった。

仏教が単に悟りや諦観のみではなく、明日の庶民生活への応援歌となる方法はないか、とサヨは絶えず自問していた。

その間も、懐かしい岩瀬のことを忘れる日は一日もなかった。金沢で強風が来ると、岩瀬は山間だから風は心配ないだろうとか、雪が降ると、岩瀬ではどれくらい積もつただろうかと心配になった。

クルミの佃煮を見れば岩瀬のクルミの大木を思い出し、石魚を見ると熊瀬川で川遊びをした幼い頃の友を思い出した。

又、饅頭やモチを見ると、これをタローに食べさせてやりたい、といたたまれなくなることもあった。

そんな時、長町の花屋が救いだった。

おミネさんが言うようには、妹のおトシさんはそんなに華奢ではなく、他人の目から見るとおミネさんに似たところはあったし、うどんの味もそんなに悪くなかった。

花屋へ行くと、同じ山里の岩瀬出身者同士話が弾み、二人でいつまでも岩瀬のコトバでしゃべっているのを、生まれも育ちも金沢のおトシさんのダンナさんに冷やかされた。

おトシさんの情報によると、岩瀬の小学校も次第に充実し、文化・文明の波が少しずつ押し寄せている風なこと、杉原家においてタローは跡取り息子として大切に育てられていること、夫の弟夫婦の子供達ともイトコ同士で仲良くやっていること、タローは小学校でも成績がよく、又集落の峰蓮寺の血を引く子供として一種の人気者であることも分かった。

今年も七月が近づいてきた。

とつくに梅雨に入っているとはいえ、ほとんど雨らしい雨が降らず、五月晴れがズーッと続いているような天候である。

そろそろ氷室饅頭を松任の松慶寺へ届ける日が迫ってきた。松慶寺は、松任では由緒ある中位のお寺だが、サヨがいる金栄寺とは遠縁である。

六月末、饅頭を持ってサヨは金沢を出発した。

街中を抜けて、北国街道を南へと行く。

街道には砂ぼこりが立ち、夏を思わず暑さではあったが、道には多くの人が行き来しており、サヨも歩くことには慣れていた。たまに馬車が通る程度で、移動の手段はまだまだ徒歩が多かった。

サヨは松任へ行くのが好きである。

南へ行くにつれ、左手の白山がだんだんサヨの方を向いてくれる。

正面から見る白山は一段と広大で、包容力があり、不動の山に見えた。そして、あの辺りが岩瀬だろうか、白山の向こうは富士山のある東海道だろうか、思いを巡らし空想するのが楽しく、足の疲れは全く感じなかった。

途中の茶屋で食べる昼食も楽しかった。

サヨは冷たいソーメンが好物だった。ダシを取るために焼いたゴリが入っているが、それを頭ごと食べる時、やはり思い出すのは幼友達と熊瀬川ですくったゴリであった。茶屋に座り冷たいソーメンを食べている贅沢を、岩瀬の人々に申し訳ない気もした。

松慶寺へ着くといつもの通り住職夫妻が出迎えてくれる。一人息子が京都で仏教関連の学校へ行っているので、二人つきりである。

今日はここに一泊する。例年のことでもあり、小旅行としてサヨにとっては楽しみの一つである。風呂にも入れてもらい、すっかり気心の知れ合った夫妻と話が尽きない。

加賀平野の農産物を土産に松慶寺からの帰りは、しかしちよつとさみしい。

小旅行が終わったということもあり、さらに右手の白山が少しずつそっぽを向いていくからである。

代わりに医王山が大きくなってくる。

大体毎年、松慶寺から帰って来ると雨が降り出す。梅雨も終わり頃には豪雨が来る。犀川の水音が不気味である。

秋は落葉の掃除に追われる。

小なりとも境内には木が多く、毎日の掃除は欠かせない。

十二月の報恩講の合間を縫って、ブリのカブラ寿司を持って松慶寺へ行く。

氷室饅頭の時は暑かったが、今度は氷雨の中、かなり重いカブラ寿司を持って雨具に身を包みの行程である。

しかし、松慶寺へ行くのはサヨにはいつも楽しく、特に十二月には楽しみは他にもあった。

それは息子さんの慶了が、冬休みに帰省しているからである。年齢がサヨと同じ程であり話も合った。

時雨の中、重いカブラ寿司を持って松慶寺へ着く。冷え切った

サヨを、松慶寺の人々は温かく迎えてくれる。

慶了の京都の話聞くのが、サヨは大好きであった。

慶了は仏教の話もさることながら、京都の生活、風俗、文化、そしてその根底にある仏教についても分かりやすくユーモアを交えて話してくれる。

そして、仏教の高説にこだわるのではなく、それは和歌や茶道と同じく文化の一つであり、衣・食・住の獲得競争による共倒れから人々を守るものの一つである、という話もサヨには斬新であった。

一杯の番茶をはさんでの対話が、こんなにも楽しいものなのか。サヨには慶了自身が仏教に思えた。

明治二十七年、日清戦争が始まるうとしていた六月末、サヨは例のように氷室饅頭を持って松慶寺へ向かった。戦争の気配に世は騒然とし、軍人の姿が慌ただしく軍都金沢を行き来していた。大国・清を相手に戦争をする緊張感が満ちていた。

松慶寺へ着いたサヨを驚かせたのは、いつもは京都にいるはずの慶了の姿であり、サヨをもっとびびくりさせたのは、そのやつれ方であった。

僅か半年前の大みそかに会った時も、少しやせたみたい、とサヨは感じたが、しかし目の前にいる慶了は全くの別人である。

聞けば京都で授業中に咯血し、即入院したとのことである。結核であった。

そして四月の終わりに帰省して、今は自宅療養中とのことであ

る。

慶了の顔を見た瞬間、サヨは今までの人生で経験したことのないような闘争心が沸き起こった。

サヨへの感傷を心配して、その夜は松任の旅館に泊まり、今後は来ないように、という三人の気遣いをはねのけ、サヨは強引に松慶寺に泊まった。聞くと、慶了の病気を知って、出入りしていた檀家の人々も足が遠のいたとのことであった。

サヨは決心した。

「この人の看病をすることが、私のこれからの人生だったんだ。亡き母のように、自分を犠牲にしてもこの人を助けよう」

翌日、サヨは金栄寺へ帰った。道々、初夏の暑さも全く気付かなかった。

二三日して金栄寺の住職夫妻がサヨに、「松慶寺へは行かない方がいい。向こうからも手紙で、強く言ってきた」と告げた。

梅雨も上がり、夏の太陽が犀川の水面にキラキラと反射している。サヨの心は、常に松慶寺にあった。この暑さに慶了はどうしているのだろうか。

八月初旬の早朝、こっそりとサヨは松慶寺へ向かった。

一ヶ月ぶりを見る慶了は、幸いにもそれほどやつれてはいなかった。

サヨの顔を見ると、一瞬困惑した表情を浮かべた住職夫妻もホッとした風であった。息子の慶了が、サヨに会いたがっているのに気付いていたからである。

早速サヨは慶了の部屋を若い力で隅々まで掃除し、布団も干

し、野の花も活けた。

天日に干しふつくらとした布団に横たわった慶了が、サヨの活けた花を見て、「朝顔やつるべ取られて もらひ水 か」とつぶやいた。

「それって、俳句ですか」とサヨ。

「そうや、加賀の千代女は、松任の人なんや。サヨさんも俳句作るんか」

「私は俳句というものがある、ということとは本で知りましたが自分で作ったことはありません。俳句の作り方、教えてください」

「俳句を作るには、自分の身近なことに愛情を持って注意深く見ること、そしてそれを人に余韻を与え想像を促す言葉で表現するんや。この千代さんの句でも、

台風に つるべ壊され もらひ水

では俳句的でなくなる。この違い、サヨさん分かるか」

「ウーン、でも朝顔より台風の方が本当にあることに近いと思います。俳句って作り話を書くんですか」

「イヤー、そうではなくて。何と説明したらいいか……」

「アツ分かった。こんなのは俳句らしくないということだけは分かります」。

汗かいて 冷たい麦茶の おいしさよ」

「ハハハハ サヨさん、そこまで分かればすぐうまくなるよ」
久しぶりに聞く慶了の笑い声が、居間の両親にも聞こえてきた。

二人の顔には、ホツとした安堵の表情が浮かんだ。

その間、金栄寺側にも変化があった。

年老いていく住職夫妻の所へ、一人の男性が冬の大雪や台風の後などに時々顔を見せるようになった。サヨにはそれが住職の長男であるというのがすぐに分かった。

お寺の跡取りを嫌って、香林坊のレストランでコックをしているというのは知っていた。

やがて、長男が妻子を連れて金栄寺へ現れるようになる頃、サヨは安心して慶了の看病に没頭していった。

金栄寺側も、今ではサヨの松慶寺行きを黙認し、物心両面にわたってサヨを応援している。

松任のかかりつけの医師と看護婦に接する内に、物覚えのいいサヨは、今ではプロの看護婦並みの力量を身に付けている。

慶了の病気は、いわば小康状態がズーツと続いていた。しかしサヨのおかげで慶了の心は白山のようにゆったりと安定していた。

サヨの金栄寺と松慶寺を行き来する生活が十年も続いた。

明治四十年の初冬、慶了の父が脳卒中で倒れた。

最後に枕元へ妻と慶了とサヨを呼んで、

「サヨさん、長い間ありがとう。おかげでワシは心置きなくあの世へ行ける。バーサンとも相談したことやが、ムスコの慶了のヨメになつてくれんか。病気のムスコと一緒にしても楽しいことはないかもしれないが、ワシとバーサンの最後のお願いや。又この寺の跡継ぎやが、この寺は続けて欲しい。あんたもお寺の血を引く人だと聞いている。あんたの残してきた息子さんの子供でもない。ムスコと相談して寺を守ってくれ」横で妻も涙を拭きつつ頷

いていた。

病気は完治しなかったが、慶了はサヨの手厚い看護の下、七十歳近くまで長生きすることが出来た。

二人で力を合わせ、加賀の千代女の一代記をまとめたことが二人の誇りである。

松慶寺も、サヨの息子・タローの次男に継いでもらうこととし、慶了も納得して一生を終えることが出来た。

太平洋戦争が終わって、十年余り、八十八歳の米寿を迎えた小春日和、サヨは松慶寺の縁側から、秋の澄んだ空気の中にゆったりと横たわっている白山を眺めていた。

いろんなことのあるサヨの人生に比べ、白山には何の変化もなく、悠然と立っている。

サヨの人生の進路を決めたものは、家の存在であった。

一人サヨのみがそうではなく、上下を問わずすべての人の人生が家によって規制されてきた、と言っても過言ではない。

サヨもそのことにほとんど疑問を抱かず、与えられた立場に全力で尽くしてきた。

しかしサヨは自分の人生が暗く、不自由であったとは全く感じていない。むしろ外部的不自由さが、かえって内面の迷いをなくし、気楽さと自由な心の一生であったと思う。

さらに、戦後の急激な制度的自由が、かえって人々の心に迷いと不安をもたらし、自分の存在価値と達成感をどこまでいっても見つけることが出来ない人が多くなっているのではないか、と思

う時もある。

おミネさんの予言通り、サヨは岩瀬へは再び行くことはなかった。

しかしそのことが、かえっていつまでも思い出を鮮明にし、故郷の情景が心の中で自由に空想され、サヨを楽しませてきた。

白山を眺め、あの辺りが岩瀬だろうかと思いつつ、縁側で抹茶をすするのがサヨの至福の時である。

